

# 1 型糖尿病をもつ子どもの療養行動と食事・低血糖・高血糖の場面における親子の関わり

駒井志野<sup>1)</sup>, 内田雅代<sup>1)</sup>, 竹内幸江<sup>1)</sup>, 三澤 史<sup>1)</sup>, 平出礼子<sup>2)</sup>,  
青木真輝<sup>3)</sup>, 柳澤節子<sup>4)</sup>, 森 哲夫<sup>5)</sup>

**【要 旨】** 小学5年生から高校生の糖尿病をもつ子どもが、療養行動をどう思っているのか、また、療養行動の場面における親子の関わりをそれぞれがどのように捉えているのかを明らかにすることを目的に、1型糖尿病をもつ子どもとその親21組を対象として質問紙調査を行った。子どもたちは、食事療法と血糖測定において、必要性を理解してはいるが面倒とも思っていることがわかった。また、食事場面、低血糖場面、高血糖場面での親子の関わりからは、親の意図・気持ちが子どもにうまく伝わっていないこと、さらに、高血糖場面での親の関わりを良く思っていない子どもが多いことがわかった。

**【キーワード】** 1型糖尿病, 療養行動, 子ども, 親子の関わり

## はじめに

糖尿病をもつ子どもは日常生活の中に、食事療法、インスリン注射、自己血糖測定、低血糖への対処など、糖尿病に関連した生活管理行動(以下療養行動とする)を組み入れて生活している。療養行動は、幼少時には親が主体となり管理しているが、小学校高学年ごろからは自分で考え行動することが求められる。この管理の主体の移行時期は、糖尿病を持たない子どもにとっても心身の変化の大きい思春期の入り口であり、様々な要因から生活が乱れやすい時期でもある。このような中で、実際に糖尿病の子どもをもつ親が子どもとの関係をどのようにとっていくかは難しいことが多く、困難な事例もみられる。

そこで本研究では、糖尿病をもつ子どもが自分の療養行動をどう思っているのか、また、療養行動の場面における親と子どものやりとりに焦点をあて、その中でお互いの行為をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とする。

## 研究方法

### 1. 調査対象

A県の1型糖尿病をもつ小学5年生から高校生の子どもと家族の会の会員、及び糖尿病サマーキャンプの参加者とその親を対象とした。

### 2. 調査方法

研究の主旨を説明し同意の得られた子どもとその親へ自記式質問紙を郵送し、調査を行った。

### 3. 調査実施時期

2005年2月

### 4. 子どもへの質問紙内容

1) 子どもの療養行動について、と2) その療養行動場面での親の関わりを子どもがどう捉えているかについて尋ねた。1)療養行動については兼松らの作成した「糖尿病患者の療養行動質問紙」(兼松, 中村, 内田, 1997)をもとに、食事療法、インスリン注射、自己血

<sup>1)</sup>長野県看護大学, <sup>2)</sup>長野県看護大学大学院看護学研究科博士前期課程, <sup>3)</sup>長野県立こども病院, <sup>4)</sup>信州大学医学部保健学科, <sup>5)</sup>国立病院機構長野病院  
2006年10月10日受付

糖測定、低血糖への対処、運動、日常生活に関する32項目（内田ら、1999）を、技術、知識、自立、気持ちの側面を含む選択肢により回答を求めた。2) 食事・低血糖・高血糖場面での親の関わりを子どもがどう捉えているかについて、選択肢と自由記述により回答を求めた。

5. 親への質問紙内容

子どもの食事・低血糖・高血糖場面での親の関わりを親自身がどう捉えているかについて、選択肢と自由記述により回答を求めた。

6. 分析方法

子どもの療養行動については点数化をおこない、総得点を算出した。採点方法は、兼松らが作成した採点方法に準じ、最も望ましい回答から3点、2点、1点とし、無回答項目は0点とした。療養行動32項目のうち「インスリン量を自分で変えることがあるか」については点数化が難しかったため、31項目での点数化をおこなった。療養行動に対する子どもの気持ちについては小学生・中学生・高校生の特徴をみた。親子の関わりについては、食事場面、低血糖場面、高血糖場面別に子どもの回答と親の回答を比較した。更に、療養行動場面での親子の関わりをケース毎に分析した。

7. 倫理的配慮

依頼文に、研究参加は自由意志によること、回答は無記名であること、できるだけ親子間での相談はしないことを明記し、親子それぞれの回答は自身で封をした後、家族毎に大封筒に入れ返送してもらった。

2005年1月に長野県看護大学倫理委員会の審査を受け、承認された（審査番号36）。

結 果

21組の親子から回答が得られ、回収率は52.5%であった。子どもの属性は、小学生8人、中学生8人、高校生5人で、男子7人、女子14人であった。親の属性は、30代3人、40代14人、50代4人で、母親19人、父親2人であった。

1. 子どもの療養行動

療養行動についての31項目の得点分布は、表1のとおりである。対象全体の平均点は69.0点であり、学年別の平均点では、小学生67.3点、中学生72.2点、高校生66.8点であった。最高点は81点（中学生）、最低点は57点（中学生）であった。

表1 子どもの療養行動：得点の分布表 (点)

項目 (得点範囲)	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5
A 日常生活4項目(0~12)	7~12	6~11	7~11
B 食事療法7項目(0~21)	10~16	8~20	9~13
C インスリン療法5項目(0~18)	10~16	11~16	12~15
D 自己血糖測定8項目(0~24)	10~21	15~22	13~23
E 低血糖5項目(0~15)	9~13	9~14	10~12
F 運動2項目(0~6)	2~5	1~5	2~6
計 31項目(0~96)	58~78	57~81	60~73

1) 日常生活

生活時間が規則的かでは「大体規則的・とても規則的」が15人であった。毎日の生活をどう思うかでは「楽しい・面白い」が13人、「普通・特にどうということもない」が11人、「つまらない・つらい」が5人であった。

2) 食事療法

間食の量については「決めている・大体決めている」が4人、「あまり決めていない」が15人であった。また、外食の時病気のことを考えて食べるかでは「いつも考えて食べる」7人、「時々考えて食べる」8人、「考えないで食べる」6人であった。決められた食事を守ることをどう思うか（複数回答）では「体のために必要・仕方ない」が12人、「難しい・面倒・友達と違うので嫌」も12人であった。その他には「つらい」という記述があった（表2）。

表2 決められた食事を守ることをどう思いますか(複数回答)

	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	計 N=21
体のために必要・仕方ない	5	5	2	12
なんとも感じない・簡単	2	3	1	6
難しい・面倒・友達と違うので嫌	5	3	4	12
その他	0	2	0	2
のべ数	12	13	7	32

## 3) インスリン療法

インスリン注射をすることについてどう思うか（複数回答）では「体のために必要・仕方がない」が7人、「なんとも感じない・簡単」が9人、「面倒・友達と違うので嫌」が7人であった（表3）。

表3 インスリン注射をすることについてどう思いますか（複数回答）

	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	計 N=21
体のために必要・仕方がない	1	4	2	7
なんとも感じない・簡単	5	2	2	9
難しい・面倒・友達と違うので嫌	3	2	2	7
その他	1	0	0	1
のべ数	10	8	6	24

## 4) 自己血糖測定

血糖を測ることについては「とても役に立っている」が12人、「少しは役に立っている」が8人であった。血糖測定をすることについてどう思うか（複数回答）では「体のために必要・仕方がない」は8人、「なんとも感じない・簡単」は6人、「難しい・面倒・友達と違うので嫌」が11人であった。その他には「とても嫌だ」「したくない、痛くて嫌だ」の記述があった（表4）。最近の血糖コントロールの自己評価は「非常に良い」が2人で、「あまり良くない」は10人、「まあ良い」は9人であった。

表4 血糖測定をすることをどう思いますか（複数回答）

	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	計 N=21
体のために必要・仕方がない	1	4	3	8
なんとも感じない・簡単	3	2	1	6
難しい・面倒・友達と違うので嫌	4	6	1	11
その他	1	1	0	2
のべ数	9	13	5	27

## 5) 低血糖への対処

低血糖の対処は「いつも・大体自分で出来る」が20人であった。低血糖を我慢してしまうことは「たまにある・時々ある」が17人であった。補食をすることについてどう思うか（複数回答）では「体のために必要・仕方がない」が9人、「なんとも感じない・簡単」が10人、「面倒・友達と違うので嫌」が7人であった（表5）。

表5 補食をすることについてどう思いますか（複数回答）

	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	計 N=21
体のために必要・仕方がない	4	3	2	9
なんとも感じない・簡単	1	7	2	10
難しい・面倒・友達と違うので嫌	4	2	1	7
その他	0	0	0	0
のべ数	9	12	5	26

## 6) 運動

運動をしているかについては「している」が13人、「していない」が8人であった。運動をすることについてどう思うか（複数回答）では「体のために必要」が5人、「なんとも感じない・簡単」が10人、「面倒」が3人であった（表6）。

表6 運動をすることについてどう思いますか（複数回答）

	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	計 N=21
体のために必要	2	2	1	5
なんとも感じない・簡単	5	3	2	10
面倒	1	1	1	3
その他	2	0	0	2
のべ数	10	6	4	20

## 2. 食事場面での親子の関わりと気持ち（表7）

## 1) 子どもの回答

選択肢による回答で、食事場面で親は「食べる量を気にする」が10人、「気にしない」が9人、「見守る」が1人であった。自由記述による小学生の回答では、食事場面での親の関わりは「ありがたい」2人、「今のまま続けてほしい」1人などがあつた。中学生の回答では「満足している、ありがたい」4人、「食事の制限をしないでほしい」1人などがあり、高校生の回答では「量は自分に任せてくれるのでありがたい」1人、「バランス良く作ってくれるので安心」1人であった。

## 2) 親の回答

選択肢による回答で、食事場面で親は「食べる量が気になる」が12人、「本人にまかせて大丈夫」が5人であった。自由記述による小学生の親の回答では「どれだけ食べればいいのか自分で管理できるようになって

もらいたい」3人、「退院直後、子どもは食べたいものを我慢して一日中イライラしていた。主治医と相談して程々に食べてもよいと決めた」1人などがあつた。中学生の親の回答では「どうすれば満足しながらコントロールも良い食事がとれるか話していきたい」3人、高校生の親の回答では「本人の知識の範囲で任せている」1人、「神経質過ぎたと反省」1人などがあつた。

3. 低血糖場面での親子の関わりと気持ち (表8)

1) 子どもの回答

選択肢による子どもの回答では、低血糖時に親は「心配している」が10人、「なぜ低いか聞く」が7人であつた。自由記述による小学生の回答では、低血糖時

の親の関わりは「このままでよい」5人、「ありがたい」2人などがあつた。中学生の回答には「満足している」2人、「過剰に心配している時があり、少し低血糖が言いにくい」1人など、高校生の回答には「低血糖になったことを親に話さない」1人、「何度も心配されたりすると自分も不安になるので話かけないでほしい」1人などがあつた。

2) 親の回答

選択肢による親の回答では、低血糖時に親は「なぜ低いか気になる」が10人、「心配になる」が9人、「本人にまかせて大丈夫」が8人であつた。自由記述による小学生の親の回答では「あまりうるさくなく指導している。自分で対処できるようになってほしい」2人、

表7 食事場面での親の関わりについて

子どもの回答 【選択肢】	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	親の回答 【選択肢】	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5
食べる量を気にする	5	4	1	食べる量が気になる	6	4	2
見守る	1	0	0	本人にまかせて大丈夫	1	3	1
気にしない	2	4	3	気にしない	2	1	2
【自由記述】 ・ありがたい (小学生：2) ・今のまま続けてほしい (小学生：1) ・満足している、ありがたい (中学生：4) ・食事の制限をしないでほしい (中学生：1) ・量は自分にまかせてくれるのでありがたい (高校生：1) ・バランスよく作ってくれるので安心 (高校生：1)				【自由記述】 ・どれだけ食べればいいのか自分で管理できるようになってもらいたい (小学生：3) ・退院直後は食べたいものを我慢して子どもは一日中イライラしていた。主治医と相談して程々に食べてよいと決めた (小学生：1) ・どうすれば満足しながらコントロールも良い食事がとれるか話していきたい (中学生：3) ・本人の知識の範囲で任せている (高校生：1) ・神経質過ぎたと反省 (高校生：1)			

表8 低血糖場面での親の関わりについて

子どもの回答 【選択肢】	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	親の回答 【選択肢】	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5
なぜ低いか聞く	5	2	0	なぜ低いか気になる	6	3	1
心配している	5	4	1	心配になる	4	4	1
イライラしている	0	0	1	イライラする	1	0	0
見守る	1	1	1	本人にまかせて大丈夫	4	3	1
気にしない	1	0	3	気にしない	0	1	1
【自由記述】 ・このままでよい (小学生：5) ・ありがたい (小学生：2) ・満足している (中学生：2) ・過剰に心配している時があり、少し低血糖が言いにくい (中学生：1) ・低血糖になったことを親に話さない (高校生：1) ・何度も心配されたりすると自分も不安になるので話かけないでほしい (高校生：1)				【自由記述】 ・あまりうるさくなく指導している。自分で対処できるようになってほしい (小学生：2) ・高学年になり自分で対処するよう叱ってしまいストレスになっていると思う (小学生：1) ・子どもと話し合うが子どもの気持ちを理解できないことがある (中学生：1) ・補食の量が多いことに触れると子どもが苛立つ (中学生：1) ・自分で対処できるので手を出さない (高校生：3) ・不機嫌になるので扱いにくい (高校生：1)			

表9 高血糖場面での親の関わりについて

子どもの回答 【選択肢】	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5	親の回答 【選択肢】	小学生 N=8	中学生 N=8	高校生 N=5
なぜ高いか聞く	6	4	1	なぜ高いか気になる	7	6	4
心配している	2	4	1	心配になる	3	4	0
イライラしている	1	0	0	イライラする	1	1	0
見守る	1	1	0	本人にまかせて大丈夫	2	1	2
気にしない	1	0	4	気にしない	1	0	1
【自由記述】				【自由記述】			
・あまり怒らないでほしい（小学生：3） ・運動しないからだと言われて苛立つ（小学生：2） ・イライラするから話かけないでほしい（中学生：1） ・責めるようなことを言われて苛立つ（中学生：1） ・高血糖になったことを話さない（高校生：1） ・話かけることはできるだけやめてほしい（高校生：1）				・つい怒ったりうるさく言ってしまう（小学生：2） ・何を食べたか確認する（小学生：2） ・けんかになりイライラする（中学生：2） ・あまり言わないようにする（中学生：2） ・落ち着いて話し合いたい（中学生：2） ・機嫌が悪くなるので理由は聞かない（高校生：1） ・あまり言うとストレスで高くなると言われる（高校生：1）			

「高学年になり自分で対処するよう叱ってしまいストレスになっていると思う」1人などであり、中学生の親の回答では「子どもと話し合うが気持ちを理解できないことがある」1人、「補食の量が多いことに触れると子どもが苛立つ」1人などがあつた。高校生の親の回答では「自分で対処できるので手を出さない」3人、「不機嫌になるので扱いにくい」1人などがあつた。

#### 4. 高血糖場面での親子の関わりと気持ち（表9）

##### 1) 子どもの回答

選択肢による子どもの回答では、高血糖時に親は「なぜ高いか聞く」が11人、「心配している」が7人、「見守る」が2人、「気にしない」が5人であつた。自由記述による小学生の回答では「あまり怒らないでほしい」3人、「運動しないからだと言われて苛立つ」2人などがあり、中学生の回答には「イライラするから話かけないでほしい」1人、「責めるようなことを言われて苛立つ」1人、高校生の回答には「高血糖になったことを話さない」1人、「話かけることはできるだけやめてほしい」1人などがあつた。

##### 2) 親の回答

選択肢による親の回答では、高血糖時に親は「なぜ高いか気になる」が17人、「心配になる」が7人、「本人にまかせて大丈夫」が5人であつた。自由記述による小学生の親の回答では「つい怒ったり、うるさく言ってしまう」2人、「何を食べたか確認する」2人

などがあつた。中学生の親では「けんかになりイライラする」2人、「あまり言わないようにする」2人、「落ち着いて話し合いたい」2人などがあつた。高校生の親では「機嫌が悪くなるので理由は聞かない」1人、「あまり言うとストレスで高くなると言われる」1人などがあつた。

#### 5. ケース分析

小学生・中学生・高校生それぞれのグループ内で、療養行動総得点の高い子どもと低い子どもに注目し、個々の親子の関わりと療養行動との関連について分析した。

ケース1：小学5年生、女子、療養行動総得点58点

子どもは、毎日の生活を「つらい」と答えていた。また、決められた食事を守ること、インスリン注射をすること、血糖測定をすること、補食をすることについて、それぞれ「面倒である」を選択していた。親についても、自分のことを「あまりわかってくれない」と思っていた。親は子どもの疾患に対する理解力不足を悩んでおり、「子どもが低血糖に気付けない。主食を平気で残す」などの記述があつた。また、「症状でイライラしているのに怒ってしまう。優しくできない」と自分の関わりを振り返っていた。

ケース2：小学6年生、女子、療養行動総得点78点

子どもは高血糖時の親の関わりを不満に思っており、「高血糖でイライラしているのに、何か聞かれるとキレちゃう。血糖が下がってからにして欲しい」などの

## 考 察

記述があった。親も、「食べすぎで高血糖になるので、つい怒ってしまう」とあり、子どもの食事行動での不備を心配し、過干渉になっている姿が伺えた。親は子どもの意思を大切にしているかについて、子どもの回答は「どちらかというとしない」であり、親の回答は「どちらかというとする」であった。

ケース3：中学2年生，女子，療養行動総得点57点

子どもは親と食事量やおやつについてあまり話をしていないと捉えていたが、親は間食が多いことが気になっており、そのことについていつも子どもと話をしていると記述していた。家族内での話し合いや相談についても、親の回答は「どちらかというとしている」であったが、子どもの回答は「していない」であった。

ケース4：中学2年生，男子，療養行動総得点81点

子どもは低血糖・高血糖場面での親の関わりを「見守る」と捉え、食事場面での親の関わりを「ありがたい」と記述していた。親は、低血糖・高血糖時に「子どもが自分で工夫できるようになってもらいたい」と思い関わっていた。また、親は子どもの食事に対する欲求を少しでも満足させたいと考えているが、子どもは「少しでも多く食べたい」と願っているため、食事内容を見て「これは1単位より少ないんじゃないか」と言ったり、少しでも不足があればミカン1房で調節するなど、子どもの細かいこだわりに対応することに親はストレスを感じていた。

ケース5：高校1年生，男子，療養行動総得点60点

療養行動場面での親子の関わり自体は少ないが、親は「本人に任せても大丈夫」と考えており、子どもも「任せてくれている」と感じていた。食事に関して、親は「バラエティにとんだメニュー」を心がけており、子どもも「バランスがとれた食事ができている」と認識していた。

ケース6：高校2年生，男子，療養行動総得点73点

親子とも、療養行動場面での親子の関わりについての設問がほとんど空白ではあったが、親の記載には「今は子どもと自分のペースでうまく管理できているほうだと思う」とあった。

## 1. 子どもの療養行動に対する気持ち

食事療法と血糖測定についての気持ちでは「体のために必要・仕方がない」の回答と「難しい・面倒・友達と違うので嫌」の回答がいずれも多く、必要性を理解する気持ちと、でもやりたくないという気持ちの2つが混在していることが考えられる。食事療法では特に高校生に「難しい・面倒・友達と違うので嫌」と思っている子どもが多く、これには友人関係の広がりや行動範囲の拡大が影響しているものと思われる。血糖測定では小学生・中学生に「難しい・面倒・友達と違うので嫌」と思っている子どもが多く、また、小学生には「体のために必要・仕方がない」という思いが少なかった。年少であればある程、血糖測定の必要性を理解するよりも面倒なことは嫌であるという素直な気持ちが前に出ていると考えられる。補食については、特に小学生が「難しい・面倒・友達と違うので嫌」と思っており、中学生では「なんとも感じない・簡単」と思う子どもが多かった。子どもの療養行動に対する気持ちには、学校での教師や友人の理解も大きく関与してくると思われ、特に血糖測定やインスリン注射、補食においては、その影響は大きいのではないかと考えられる。子どもが周囲に気兼ねなく注射や補食などの療養行動を行えるためには、学校との協力や友人への疾患の説明が大いに役立ってくる。

## 2. 食事場面での親子の関わりについて

食事場面において、親が「本人にまかせて大丈夫」と思い見守る姿勢で関わっていても、子どもによってはそれを「気にしていない」と捉えていた。親の気持ちや意図が子どもにはあまり伝わっていないのではないかと考える。自由記述からは、食事において親に「嬉しい、ありがたい」、「満足している」などの肯定的な思いを持っている子どもが多いことがわかり、親が子どもの満足と良い血糖コントロールの両面を考え献立を工夫している姿を見ているからであると考えられる。ケース4にもあるとおり、毎日の食事の準備や食事内容についての会話は親にとっても大きな負担になっていることを理解する必要がある。

### 3. 低血糖場面での親子の関わりについて

低血糖の場面においても、親が「本人にまかせて大丈夫」と思い関わっていても、子どもによってはそれを「見守る」と捉えていなかった。また、小学生は、親の関わりに対して「このままでよい」「ありがたい」などの肯定的な思いが多いが、中学生・高校生になると「低血糖になったことを親に話さない」「話しかけないで欲しい」などの思いが出てくる。思春期には、それまで絶対的な権威であった親に対して批判的になり、親の意見や指示に従わず反発したり反抗してみたりする。親の支配や干渉を極端に嫌うので、親の理解不足や権威の押しつけは関係の悪化につながることもあると考える。しかし、依存心や甘えの気持ちも存在し、アンビバレントな感情をもつことから親にとっては関わりに困難を感じる時期となる。親の自由記述からも、中学生・高校生の子どもへの関わり方に困難を感じていることが伺える。

### 4. 高血糖場面での親の関わりについて

高血糖の場面においては「あまり怒らないでほしい」「責めるようなことを言われて苛立つ」「話しかけることはできるだけやめてほしい」など、小学生・中学生・高校生ともに親の関わりを良く思っていない内容の自由記述が多かった。親の回答からも、低血糖時より高血糖時の方が親の関心が高いことがわかる。高血糖が続けばHbA<sub>1c</sub>値のコントロールに影響し、将来の合併症につながってしまう。高血糖に敏感になるのは、親としては当然であるのかもしれない。しかし、子どもたちは血糖値やHbA<sub>1c</sub>値を絶対的なもの、自分の療養行動の表れであると理解している(谷口, 2005)。数値が高い理由は子どもたち自身もわかっているのだということを踏まえながら、親は子どもに関わっていくことが大切であると考えられる。

### 5. 療養行動と親子の関わりについて

今回のケース分析からは、個々の親子の関わりと療養行動との関連に明らかなものはなく、療養行動総得点の高低に関わらず親子の関係は様々であった。よって、個々の親子関係に着目することでよりその親子にあった支援につながると考えられる。また、小・中学

生に比べ高校生では、療養行動場面での親子の関わりそのものが少なくなっていたが、それは子ども自身が考え行動できていることと親もそれを認めていることによるものと思われた。

### おわりに

本研究は、家族会やサマーキャンプに参加している親子21組からの質問紙調査による回答をまとめたものである。今後は、このような集まりに参加することのない親子も対象とし研究を重ねることで、療養場面におけるより多様な親子関係の様相が明らかになると考える。

### 文 献

- 兼松百合子, 中村伸枝, 内田雅代 (1997): 療養行動質問紙の作成と活用. 千葉大学看護学部紀要, 19: 71-78.
- 日本糖尿病学会編 (2001): 生活指導. 小児・思春期糖尿病管理の手びき. 129-134, 南江堂, 東京.
- 谷洋江 (2003): 1型糖尿病をもつ子どもと家族のライフスタイルに合わせた支援・思春期の子どもと家族. 小児看護, 26(7): 837-841.
- 谷口恵美子 (2005): 1型糖尿病の中学・高校生が病気を持って生活することをどのように捉えているか. 平成17年度長野県看護大学大学院看護学研究科修士論文.
- 上田礼子 (2005): 学童期・青年期. 生涯人間発達学. 136-165, 三輪書店, 東京.
- 内田雅代, 竹内幸江, 栗林浩子他 (1999): 小児糖尿病患児の日常生活習慣・療養行動と両親のライフスタイルについて. 平成8-11年度長野県看護大学特別研究成果報告書, 46-49.

【Summary】

## Self-Care Behaviors of Children with Type1 Diabetes and the Relationship between Children and Their Parents coping with Dietary Management, Hypoglycemia and Hyperglycemia.

Yukino KOMAI<sup>1)</sup>, Masayo UCHIDA<sup>1)</sup>, Sachie TAKEUCHI<sup>1)</sup>, Fumi MISAWA<sup>1)</sup>,  
Reiko HIRAIDE<sup>2)</sup>, Maki AOKI<sup>3)</sup>, Setsuko YANAGISAWA<sup>4)</sup>, Tetsuo MORI<sup>5)</sup>

- 1) Nagano College of Nursing
- 2) Graduate Student of Nagano College of Nursing
- 3) Nagano Children's Hospital
- 4) Shinshu University
- 5) Nagano National Hospital

The purpose of this study is to examine feelings of children with Type1 Diabetes on their self-care behaviors and the relationship between children and their parents on the scene of dietary management, hypoglycemia and hyperglycemia. The number of subjects of the investigation was 21 parents and children. It was found that the children thought the practice was troublesome though they understood the necessity for dietary management and self-monitoring of blood glucose. We found that most of the children did not think their parents' attitudes or behaviors to be good when they were in a hyperglycemic condition. Also we found that the children did not fully comprehend their parents' feelings and there were gaps of understanding between the children and their parents.

**Keywords:** type1 diabetes, self-care behavior, children, relationship

---

駒井志野（こまい ゆきの）  
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学  
Tel&Fax : 0265-81-5186  
Yukino KOMAI  
Nagano College of Nursing  
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 JAPAN  
e-mail: yukino-komai@nagano-nurs.ac.jp